第7回「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」 2019台北大会印象記

Keisuke OMORI (大森圭介 : President, The Toshiba International Foundation)

✉ keisuke.omori@toshiba.co.jp

(日本) 東芝国際交流財団専務理事(2016年6月から)。1984年東京外国語大学・英米語学科卒。同年(株)東芝入社。入社以来、グローバル広報業務に25年間携わる。同社CSR推進室長(2012年~2016年)。

Report on Participation at the 7th East Asia and Contemporary Japanese-Language Literature Forum, Held in Taipei in 2019

I participated in the panel discussion (workshop) titled “The Creation and Transformation of Traditional Japanese Poetry Around the World” on the second day of the “East Asia and Contemporary Japanese-language Literature Forum,” which was held from October 25 to 27, 2019, at the National Chengchi University and Soochow University in Taipei. Although my two-day trip was short, taking part in this forum was a great experience. The panel discussion was arranged and hosted by Professor Byeongho Jung, the director of the Global Institute for Japanese Studies of Korea University, who is a friend of mine. It was a highly exceptional event where researchers from regions around the world gathered to share their research findings on the theme of “The Reception and Transformation of Traditional Japanese Haiku in East Asian and European Countries from the late 19th Century to the Present.” As a result, the event offered a glimpse of future directions for the field. This forum gave me an opportunity to visit Taiwan for the first time in 20 years, and was a valuable gathering that had numerous implications for the future of East Asia, as well as providing hopeful paths forward.

Keywords Taipei(台北), Participation Report(印象記), Traditional Japanese Poetry(日本伝統詩歌), Haiku(俳句), Future of East Asia(東アジアの未来)

2019年10月25日から27日まで、台北の政治大学と東呉大学で「東アジアと同時代日本語文学フォーラム」が開催され、二日目に開催された「世界各地における日本伝統詩歌の創作と変容」というパネル(ワークショップ)に参加させていただきました。

一泊二日の短期間の出張でしたが、大変貴重で素晴らしい機会でしたので、感想を書かせていただきます。

このパネルは、私の良き友人である高麗大学グローバル日本研究院の鄭炳浩教授(現在同研究所院長)の発案と主催により実現したもので、19世紀後半から20世紀を経て、現代にいたるまで、日本の伝統詩歌である俳句や短歌が、東アジアと欧州諸国において、どのように受け入れられ、変容を遂げてきたのかを、各国(地域)の最先端の研究者が一堂に会して研究成果を発表する形で共有し、将来の展望につなげるという大変稀有な機会でした。本誌『跨境・日本語文学研究』の第9号にも、全発表内容が掲載されたことは、いかにこの共同作業に対する関心が高く、基本テーマ設定の意義が大きかったかを示すものと言えるでしょう。

今回のワークショップの要旨を若干振り返りますと、高麗大学の嚴仁卿副教授は20世紀前半の日本による朝鮮統治時代において、韓国に渡った日本人コミュニティによる当時の俳句や短歌などの伝搬の様子や世相を、当時の在朝日本人向けの新聞や専門誌の豊富な事例を使い明らかにし、また同高麗大学の金寶賢研究教授は、現代(2006年以降)の韓国における韓国俳句研究院を中心とする俳壇のあらたな発展を紹介されており、普段、現代日本の中でもほとんど知られていない事実を鮮明に描き出されました。

一方、ベトナムのホーチミン市人民社会科大学講師のグエン・ヴァー・クイン・ニュー氏は、俳句の重要構成要素である「季語」の重要性に触れ、現代ベトナムにおける俳句の今後の普及の鍵として、ベトナム固有の季節観を反映したベトナム版「歳時記」の作成の必要性を提唱され、ベトナム人の慣習や生活に根差した「季節感」というものは、必ずしも、日本固有のものではないことを指摘され、今後の大いなる可能性を感じさせるご発表でした。日本の国際俳句交流協会の黒川悦子理事は、「日本の俳句と世界のHAIKU」と題し、日本での俳句をユネスコの世界文化遺産登録を目指す動きと同時に、世界各地ではHAIKUとして、そのルールや様式に多様化が見られるなかで、人間の暮らしにおける自然との共生、自然を大切にす気持ちの再発見や、朗読、朗誦の大切さ等、世界の俳句の潮流において見逃してはならない共通のエッセンスを指摘され、私も大いに勉強になりました。上海財経大学の朱衛紅准教授は、松尾芭蕉の句の様々な中国研究者による漢訳をケーススタディとして、俳句の漢訳の課題、特に音数律から見た比較論を見事に展開され、漢詩と俳句の共通点を含め、今後の国際文学研究に大きな示唆をあたえるものでありました。また、台湾静宜大学の頼衍宏副教授は1930年代から40年代の台湾の皇民化施策において短歌が果たした役割について新たな光を当てられました。

アジア以外からも、ベルギーのルーヴェン大学のウィリー・ヴァンデワラ名誉教授は、「ヨーロッパに於ける俳句の受容、その軌跡と展望」と題し、19世紀後半の日本の開国に伴い、イギリスの外交官によって俳句が西洋にされて以降、最初は翻訳として、そしてその後、欧州の文学とお互いに影響を与え合いながら、ローカライズをしていった様子を、流暢な日本語で紹介さ

れていた姿は大変印象的でした。

私は、今回のワークショップに参加し、このような東アジアを中心とする研究者が一堂に会し、「日本語」を共通の言語にしながら、歴史の流れを率直に振り返り、将来を考える試みそのものが、この雑誌『跨境・日本語文学研究』の精神、つまり、それぞれ異なる言葉や、文化背景を持つ人間や集団が、相手の立場や価値観に大いなる関心と敬意をはらいつつ、単に相手に同化するのではなく、境界線を跨いで相互理解を深めていく、という現代の混んとした社会における基本スタンスともいうべき哲学に基づいた試みであることを実感した次第です。

さて、この寄稿文を執筆している2020年4月の現在は、新型コロナウイルスでグローバルな人的交流がほぼ完全に閉ざされ、東京オリンピックも延期となってしまいました。しかし、日本は、2019年には、3000万人以上の方が訪れ、留学を含め日本で生活する外国人の方が270万人を超す現在において、そもそも「日本」のアイデンティティとは何なのか、そして日本の文化、日本の文学や持つ普遍性と特殊性とは何なのかを解き明かすことは、日本に限らず、グローバル社会において「文化」、そして国境を越えた交流というものが人間の社会生活の知的発展を支えるうえで果たす役割をあらためて考え直すことにつながるのではないかと思います。

「文化」とは、辞書によりますと「人間の生活様式の全体。人類がみずから手で築き上げてきた有形・無形の成果(特に、哲学・芸術・科学・宗教などの精神的活動、およびその所産)の総体」であり、「それぞれの民族・地域・社会に固有の文化があり、学習によって伝習されるとともに、相互の交流によって発展してきた」とあります。(出典：小学館デジタル大辞泉)

この定義に従えば、「俳句」のように日本発祥で日本固有と見做されている文化でさえ、国内や海外との交流によって発展し得るものと解釈することが出来るのではないのでしょうか。文化の一形態とされる宗教に関しても、日本の主要な信仰の対象である仏教は、そもそもインドが発祥の地であるにも関わらず、日本に百済を経由して6世紀に伝搬して以来、日本で独自の受容と変容を経て発展し、今日に至っています。(そもそも、「宗教」という概念も、英語のReligionという言葉を入力・翻訳したものとされています。)

今までと異なるものを単純に受け入れるのではなく、「こちら」と「あちら」の両方の視点を持ちながら、超越した視点を持ち続ける「跨境」という視点、これはあらゆる地域研究において求められる基本姿勢かと思いますし、私自身も大切にしていきたいと思います。

この雑誌のタイトルともなっている「日本語文学」の今後の発展にとっても、軸となる考え方かと思います。

今回の台湾訪問は、実に私にとって20年ぶりでしたが、東アジアの未来に多くの示唆と希望を与えてくださる貴重なフォーラムでありましたことをご報告し、筆を置かせて頂きます。

以上